

2

2020年東京オリンピック・パラリンピック
開催決定が持つ意味スポーツ界にとっての2020年
東京オリンピック・パラリンピック

師岡 スポーツ界にとって、今回の開催決定には5つの意味があると考えています。

1つ目は、「オリンピック」や「スポーツ」に対する関心が飛躍的に向上したことです。これまで「スポーツ振興は重要だ」と言われながらも、国や都道府県のスポーツ関連予算が削減されたりすることがありましたが、開催決定により、スポーツ関連予算が大幅に増額されました。また、一般の方々も毎日のようにオリンピックを話題にするようになり、これまでスポーツに関心がなかった人達も関心を持つようになりました。

2つ目は、国民共通の目標と夢が生まれたということです。将来に対する明るい未来像を描いたり、共通の目標を持つたりすることが難しかった昨今において、「6年後までにはこうありたい」という共通の目標や夢を持つことができるようになりました。

3つ目は、スポーツ庁の設置に弾みがついたことです。これまでタテ割りに分散化されていたスポーツ行政が一元化・効率化するだけでなく、「庁」になることで予算の増額が期待できることは大きいと思います。

4つ目は、「スポーツ・フォア・オール」が推進されることです。『オリンピック憲章』には、「スポーツ・フォア・

オール」の発展を奨励、支援すること」が、「IOCの使命と役割」であると書かれています。オリンピック開催を引き受けたことで、IOC(国際オリンピック委員会)からは、「単に競技者のためのオリンピック競技大会を開催するだけではなく、オリンピックの開催を通してすべての人々が生涯スポーツを楽しむ環境を提供できる成熟社会の姿を世界に発信してほしい」と期待されているはず。オリンピック・パラリンピック開催決定を契機に、障がい者スポーツも含めた「スポーツ・フォア・オール」社会を実現することが推進され、多種多様なスポーツ種目があることも知ってもらえるチャンスでもあります。

5つ目は、「国際化」です。いまだにIF(国際競技連盟)の理事を務める日本人は多くありません。今回東京が開催地に決定したことで、各競技の日本協会が否応なくIFとの連携強化が必要になっていきます。日本のスポーツ組織を国際化させていく契機の到来です。この機会を「第3の開国」にしていくことが求められています。

この5つが日本のスポーツ界にとって、オリンピック・パラリンピック開催決定がもたらした意味だと思います。

クラブにとっての2020年
東京オリンピック・パラリンピック

菊地 クラブにとっては、「6年後」とい

う中期的な活動目標ができたと思います。個々のクラブにおいては、「自分のクラブで活動する子ども達がオリンピックに出られるかもしれない」と思って、2020年を一つの目標として活動するでしょう。また、SC全国ネットワークのようなクラブの全国組織においても、全国のクラブで共有できる目標の一つとなり得るでしょう。1クラブの取り組みだけでは、オリンピックに関わるのが難しい事柄でも、約3400クラブが力を結集すれば実現できることがあるかもしれません。いずれにしても、皆で集まって「自分達のできることを考えるきっかけになったと思います」。

加えて、「次世代の人材育成」と「世代交代」を促すきっかけになると思います。私のようなクラブ創設期に関わった者もいつかは運営主体を次世代に譲るタイミングが来ます。クラブが若者の就職先となるには、まだまだ課題は多いですが、オリンピックの大きな流れを活かして、オリンピック後に、若者達が「仕事」としてクラブに携わるようになれば良いですね。そのためには、クラブの自立・自律や認知度向上に向けた取り組みが必要になってくると思います。

師岡 「世代交代」は、まさにオリンピック・パラリンピックが来ることで促されると思います。昨年(2013年)ある区役所で講演と自由討論を行った際、7年後まで区役所で働いている方が

参加条件になっていました。2020年を意識すると自然と世代交代が促されていくものなのだと思います。

オリンピックが日本スポーツのあり方・価値観を変える

菊地 師岡先生のお話にありましたスポーツ庁の設置は、クラブにとっても大変大きな意味があると思います。現状では、クラブがトップアスリートを育てて学校現場に派遣するという役割まで担うことは難しいです。しかし、その役割を担うことがクラブの使命であるとも考えています。スポーツ庁設置の流れの中で、学校体育や学校部活動と地域の生涯スポーツ、障がい者スポーツ、トップスポーツなどの一体化が進んでいくとクラブに求められる使命の達成に向かっていくと思います。

師岡 スポーツ庁設置の話題も含め、今回の開催決定は、日本の体育・スポーツ制度を根本的に考え直すチャンスでもあります。日本では、明治維新の学制とともに西欧文化であるスポーツを学校に取り入れましたが、当初は「チャンピオンスポーツ」と「スポーツ・フォア・オール（みんなで楽しむことに重点をおいたスポーツ）」の両方の考え方が共に導入されました。しかし、当時の日本では、「富国強兵」「国威発揚」の流れの中で、学校体育や部活動で時には

行き過ぎた勝利至上主義の指導が行われ、それが今日まで受け継がれてきてしまい、少なからずスポーツ嫌いを生み出してきました。

勿論、勝利を目指して極限まで己を鍛え上げ、全力を尽くして競技することとスポーツの大切な要素であり、深い達成感と見る者を感動させる力の源であることは間違いありません。そのことは、オリンピックのモットー「より速く、より高く、より強く」に表されています。その一方で、有名な「参加することに意義がある」もオリンピックから生まれたスポーツのあり方を示す言葉です。

本来、「チャンピオンスポーツ」と「スポーツ・フォア・オール」は車の両輪のように相互補完的に一体となって推進されるべきものです。チャンピオンスポーツは「見る」「支える」がなければ成り立たず、一方でチャンピオンスポーツがなければ、憧れや感動からスポーツを始める人は減少してしまうでしょう。

日本の学校体育制度は、ハードもソフトも世界に誇れる素晴らしいのですが、学校を卒業した後、スポーツを続けていく受け皿が整備されていないという課題があります。幅広いジャンルを持ち、多様な楽しみ方がある音楽は嫌いな人はおらず、全ての人が生涯を通じて「音を楽しむ」ことができるように、スポーツもチェスやブリッジがIOC

公認スポーツである事実を伝え、人々の意識を変え、全ての人が生涯を通して「楽しむ」ことができる文化であることを伝え、環境を整備していく必要があると思います。

そこで、今回のオリンピック・パラリンピック開催決定を機に、スポーツには多様な楽しみ方と多様な種目があることを伝え、また学校体育の段階で地域スポーツと接点を持ち、卒業してからは地域のクラブでスポーツを楽しむことができる「生涯スポーツ社会」を構築するというレガシーを残していくべきでしょう。そうすればヨーロッパのように地域のクラブでトップアスリートが育ち、そのアスリートが指導者として地域や学校に戻ってくるという「好循環」の仕組みができると思います。

菊地 私がドイツのクラブを訪問した際には、地域のクラブからトップアスリートが輩出される仕組みもありましたが、私が特に魅力的に感じたのは、高齢者が元気に活動しているクラブでした。そのクラブの会員は、「ドイツでは税金が高くて大変な部分もあるが、このクラブにいれば誰も孤独ではなく、皆が支え合って暮らしている。それがクラブだ」と語っていました。日本のクラブにはそういった「地域にある自分の居心地の良い場所」自分の居場所としての機能がまだまだ弱いと思えますね。

師岡 これまで日本では、スポーツは

衣食住のように生存に必要なものではないとされて脇に置かれ、「時間や金銭的な余裕があればスポーツをする」といった感覚であったと思いますが、これからは、スポーツは「生活の一部」として捉えていく必要があると思いますし、その意識の変化をオリンピックを通じて醸成していきたいですね。

